



第六十三號 (第十五卷)

(昭和九年) 十一月號

## 天文と氣象

(卷頭言)

去る九月21日の關西地方の大風害が機縁となつて我が日本の一般に氣象學の普及が促進されることは、思ひがけない收穫であるといつて真かろう。吾々天文を楽しむ者も、決して氣象に無關係ではないのだから、人一倍熱心に氣象學を學んで置かねばならないと言ふまでもない。世間で、氣象と天文との區別を辨へないがため、各地の測候所へ屢々天體に關する質問をするので、測候所員たちを苦しめるといふ話をよく聞くのであるが、之れの逆を行つて、又、天文家はウツカリ一般の人々から天氣豫報のことなど聞かれて、狼狽したり、或は『私は天文家ですから、氣象のことは知りません!!』と言つて逃げて了うことも多い例である。しかし、氣象學者が星の知識を持ち合はせないために、空模様を観測そのものに多少の不便があることは豫想されると同時に、天文家にとつても、「關係が無い」などとうそぶいて、氣象の常識を持たないことは、損ばかりあつて、得る所は一つも無いのである。本誌の讀者たちにも此の意味に於いて天氣模様の判斷ぐるむは一通り出来るやうになつて貰ひたいことが望ましいので、近く本誌上にも氣象の記事を可なり多く取り入れたい希望であるし、殊に何か纏つた「氣象學通俗講座」といつたやうなものを連続的に掲げたいと思つてゐる。一さしあたり、簡単に氣象學を學ぼうとする人のためには、東京恒星社版の中村左衛門太郎博士著「ラジオによる素人天氣豫報術」といふ一書を推薦する。

花山では去る十月六日土曜の午後、京都帝大の氣象學者滑川助教授を招いて同氏を中心に、氣象に關する座談會を催した。會したものは天文臺員ばかりの内輪の會であつたが、日頃から花山では太陽部で氣象觀測を行つてゐるのと、今一つ九月21日の暴風の經驗を持つて間もないことなので、皆々非常な興味で二時間ばかりの間天氣の知識を交換し合つた。

平常から、花山は京都市中と比べて見ると、風が二倍も強く、溫度も多少冷涼で、所謂京都の「底冷え」といふものを知らない健康地であるのだが、それだけ、官舎に住む人々は特別に氣候への關心が必要であると共に、建築などにも風や雨に對する考慮が拂はれなければならないのである。しかるに、經費不足の理由があるとは言へ、天文臺創立以來、官舎と反射鏡室や太陽鏡室など、皆、木造建築であつたがため、こんどの暴風ですつかりやられて了つたのは迂割であつたと笑はれても仕方がないわけである。復興には是非此の點を考へたい。(山本)